

『源氏物語抄（紹巴抄）』の古活字本から整版本へ

——項目異同から見た改訂の様相——

妹尾好信

【キーワード】源氏物語・紹巴抄・古活字版・整版本・覆刻

はじめに

『源氏物語抄』、いわゆる『紹巴抄』の刊本には古活字本と整版本の二種類があることが知られている。そして、整版本は、古活字本の版面を版下としてかぶせ彫りした覆刻版であり、古活字本の本文をもとにして、新たに漢字の振り仮名や漢文表記部分の返り点・送り仮名などを加えたものであることも明らかである。その際、古活字本の一面十行組みを十一行組みに改めている。

筆者は、前稿『源氏物語抄（紹巴抄）の古活字本と整版本』（『広島大学大学院文学研究科論集』第六十四巻 平成十六年十二月）において、第一冊目（桐壺く簞木）をサンプルとして、両本の本文の詳しい比較考察を行なった。その結果、整版本は、古活字本にあった誤植や組版上の不備が訂正されている他、項目の立て方や注釈本文の内容にも一部手が増えられていることがわかった。

本稿では、対象を全二十冊すべてに広げ、特に項目（見出しとし

て掲げられた『源氏物語』の本文）の異同に注目して、古活字本から整版本への改訂の様相を明らかにしてみたい。

整版本の本文は、広島大学図書館中央図書館蔵『源氏物語抄』（国文一六六七N）を用い、上田市立図書館蔵花月文庫本および熊本大学蔵北岡文庫本を参照した。また、古活字本の本文は、東洋文庫蔵岩崎文庫本を用い、陽明文庫蔵本を参照した。花月文庫本以下の四本については、いずれも国文学研究資料館蔵の紙焼き写真によった。

項目の所在の掲出に際しては、『源氏物語』の巻名の次に、便宜上、広島平安文学研究会刊『翻刻平安文学資料稿』第二期『永録奥書源氏物語紹巴抄』1-10（昭51-61）の項目番号によって掲げ、同書になり項目はその直前の番号にa・b…の記号を付して表した。ただし、用例数が少ない場合には、（ ）内に整版本の所在を丁数・表（オ）裏（ウ）の別・行数で併記した。また、古活字本と整版本の見出しを並記する場合には、〈整版本〉―〈古活字本〉の形で示した。

一 古活字本の脱落箇所補充

古活字本と整版本の間の項目の出入りを調べていて、まず目につくのは、整版本には古活字本にない項目がままあることである。そのうち、古活字本にない項目が整版本に連続して存在する箇所が数箇所あるが、それらは、古活字本作成の際に誤って生じた脱落を補ったものであると推測される。

その例として、まず、次の3箇所が挙げられる。

- ①梅枝129（11ウ9）「しろぎあかき」の注釈2行目「ひらは一枚二枚也」（10行目）から、140（12ウ4）「見給ふ人の涙さへ」の注釈3行目「獲^{アツリ}麟^ヲ 哀公狩ニ出得麟^ヲ無道ノ代ニ出タルヨト也」（7行目）まで、整版本で20行分、古活字本に欠。
- ②若菜上75（58ウ1）「こなたはさま」から、73（59オ9）「くしいたく」まで、整版本で20行分、古活字本に欠。
- ③幻47（4ウ7）「君に」から、57（5ウ2）「たいのおまへの」まで、整版本で18行分、古活字本に欠。

このうち、①と②は、それぞれ整版本で20行分ずつの脱落であるから、古活字本作成時に1丁分の脱落が生じたものと考えられる。これによって、古活字本の親本も一面十行本であったことが推測さ

れる。③は、整版本にして18行分の脱落であるが、おそらく古活字本の親本ではこの部分が20行あったのであって、ここもやはり1丁分の脱落が生じたのであろう。これら3箇所の脱落部分の本文を整版本では補充しているのである。その際、補充された部分の文字使いや筆跡が前後に比して全く違和感がないのは、整版本の版下作成時に、改めて活字で組んで印刷し、覆刻版作成と同じ手順で作業を行なったためと考えざるを得ない。手のこんだことをするものであるが、これは、覆刻版の作成が、時間的にも場所的にも古活字本の作成と極めて近いところで行なわれたことを意味しているだろう。

他に、古活字本と整版本の間にまとまった項目の出入りがある箇所として、次の例が挙げられる。

- ①濔標71（27ウ2）「すきひに」・72（27ウ4）「おもひやりこと」・73（27ウ6）「ひか心え」・74（27ウ8）「あはれなりし」・75（27ウ10）「ほの見し句」の5項目（2行目〜11行目の10行分）、古活字本に欠。
- ②濔標81（28オ11）「何とかや」・82（28ウ1）「たれにより哥」・83（28ウ3）「命こそかなひ」・84（28ウ6）「心をかれしとするもた、一故とは」・85（28ウ8）「かのすくれ」・86（28ウ9）「いかに」の6項目（28オ11〜28ウ10の11行分）、70（27ウ1）「年比あかす」の次にあり。

すなわち、古活字本には整版本27ウ2から27ウ11までの10行分がなく、続く28オ1「我は又なく」から「思ふとち哥」の末尾の28オ10までの10行分と、28オ11「何とかや」から28ウ9「いかに」の末尾(28ウ10)までの11行分が入れ替わっているのである。見出し語の『源氏物語』本文での出現順から整版本の形が正しいことは明らかで、古活字本は何らかの理由で組版時に1面の脱落と2面の順序転倒が生じたようである。整版本に覆刻するにあたってそれらは補正された。ここもやはり脱落部分は新たに活字で組み直して版下を作成したと考えられる。

まとまった項目の出入りがある箇所は以上であるが、次に、古活字本にない項目が整版本に付加されている例を挙げる。次の12例である(整版本における所在を併記する)。

- ①若紫32(4オ9) たいく
- ②若紫33(4オ10) さる心はへ
- ③薄雲97(39オ2) あかす思事
- ④若菜下96(9ウ11) 神のるかき
- ⑤夕霧20(2オ11) さはかりなゝり
- ⑥竹川374(61ウ2) 侍従と
- ⑦橋姫215(17ウ5) よしさらは
- ⑧総角162(51ウ1) 身をわけて
- ⑨総角458(72ウ8) いかゝこよひは

- ⑩宿木19(12ウ8) 中納言あそん
- ⑪浮舟366(55ウ10) のちに又哥
- ⑫手習51(30ウ1) 御ようめい

①と②は連続した2項目(2行分)であるが、他はそれぞれ別々に存在する。⑪以外は写本(「平安文学資料稿」の底本。以下、「写本」と言う場合は同書をさす)にもある項目であるから、古活字本の親本とは異なる写本との校合によって付加されたものであろう。

二 注釈の一部を項目化した例、項目を注釈中に収めた例

古活字本と整版本の項目を比べると、古活字本で注釈文中にある記述を整版本では独立させて項目としたものや、逆に、古活字本で項目を立てている記事を整版本では注釈文の中に取り込んでしまっているものも存在する。

古活字本で前項の注釈文に一体化した形になっている記事を整版本で独立した項目としている例には、次のようなものがある(整版本における所在を併記する)。

- ①紅葉賀146(14オ6) 我ひとり
- ②紅葉賀147(14オ7) 人つまは哥
- ③賢木12(1ウ11) 松風すこく
- ④賢木55(5オ6) 長奉送使

⑤賢木 94（8ウ11）宮は三条の宮に藤壺の事也…（整版本は見出しと注釈の間に空白なし）

⑥松風 100（25ウ1）十四日五日晦日

⑦乙女 249（40ウ7）大殿にはことし（古活字本には「是まで一日講尺 大殿にはことし五節を…」とある）

⑧鈴虫 76（40オ1）いつとでも（古活字本はこの項を前項末に追いつ込んで一首の歌として記す）

⑨幻 31 a（3オ9）人よりことに

⑩幻 147（13オ3）ふりおつる御なみた

⑪紅梅 6（26オ4）おなし子なり

⑫宿木 489（49オ5）せちぶ

⑨は、写本でも前項「31かたはらいたき」の注釈末尾の記事になっているが、『源氏物語』本文の「人よりも」を項目化したものと考えられる。

一方、これらとは逆に、古活字本で項目としているものを整版本では注釈の中に埋没させている例には、次のようなものがある（整版本における所在を併記する）。

①葵 43（33ウ4）榻事

②滯標 89 a（29オ7）何のあやめも

③薄雲 103（39オ10）はかくし（整版本では前項下部の余白部分に

ある）

④真木柱 309（86オ3）色めかしう（整版本では前項下部の余白部分にある）

⑤幻 61 a（5ウ11）さらても（前項 61「そのことのさらても」の注の一部とする整版本や写本が正しい）

⑥紅梅 98 a（33オ3）北方と

⑦橋姫 67（7オ1）人傳にきくことなと

⑧総角 184 a（53オ4）心せはくは

⑨宿木 309 a（34オ11）いてやから

これらは、古活字本の不備を整版本で訂正したということなのだろうが、③・④・⑦は写本でも項目化されており、古活字本のごとく項目として扱うのがよいと思われる。もつとも、③と④は、整版本においても、短い項目である前項下部の余白部分に置かれた項目と見ることできる。また、整版本・写本ともに項目としていないが、⑧は『源氏物語』本文の「心せばく」に関する注として、⑨は同じく「いでや」に関する注として、それぞれ古活字本のごとく項目化してよいように思われる。やや問題を含んではいるが、これらは整版本に覆刻するにあたって、ある見識をもって古活字本の項目を廃したのであろう。

三 見出しと注釈との間の空白の有無

『紹巴抄』では、各項目は、『源氏物語』本文の一節を見出しとして掲げて、その下に約1字分の空白を置いて注釈が書かれるという形式になっている。ところが、中には組版上の不手際からか空白が置かれていない場合もある。古活字本で空白がないものは多くの場合合版本では空白が置かれて正されているが、中には正されていないものも存する。

古活字本では見出しと注釈の間に空白がないが、整版本で正されているものには、次のような諸例がある。

- ①桐壺 61 さは — さはされはこそと人く云也
- ②空蟬 53 さかし — さかし御領状也
- ③夕顔 305 とりあやまちても — とりあやまちてもくるしかるましきとなり
- ④若紫 110 仏は — 仏はまへの首尾なるへし
- ⑤若紫 286 み帳見屏風などあたりく — み帳み屏風などあたりくしはやすめ字にや
- ⑥花宴 17 源氏の君の御をは — 源氏の君の御をはてにをは也
- ⑦須磨 236 あこの — あこの我子
- ⑧明石 84 花紅葉の — 花紅葉の定家卿こゝにて…
- ⑨乙女 144 さう — さうしやうとよむへし

- ⑩乙女 238 いてや物けなし — いてや物けなしめのとの詞
- ⑪真木柱 196 中宮 — 中宮秋好中宮
- ⑫藤裏葉 153 御よろこひに — 御よろこひに群賀諸家へ也
- ⑬若菜上 628 むかしの世のあたならぬ人 — むかしの世のあたならぬ人大かたの世の人くの中の…
- ⑭横笛 139 みしかく — みしかく大かたのあはれをみしかくは中く世の(古活字本は頭が1字下がっている)
- ⑮鈴虫 46 有はてぬ — 有はてぬ哀まつまの体斗憂ことしげく思はずもかな(古活字本は頭を1字下げた一首の和歌として記す)
- ⑯夕霧 17 今しはし — 今しはし命也
- ⑰夕霧 445 人くいと所せき — 人々と所せき御子達也
- ⑱御法 49 さるは — さるはさうあつて也
- ⑲幻 84 ひろふ — ひろふこなたかなたへ…
- ⑳幻 166 a 若宮 — 若宮三宮なり(写本この項目欠。166「なやはんに」の末尾に「三宮也」とのみある)
- ㉑竹川 116 をもりにか心ふかきけはまさり給へれと — をもりにか心ふかきけはまさり給へれと此段は…
- ㉒竹川 214 おほしとむる — おほしとむる院
- ㉓竹川 367 こ宮 — こ宮螢
- ㉔橋姫 1 その比 — その比八宮の事始て書出…
- ㉕宿木 13 宮たちの御かたはらに — 宮たちの御かたはらに薫宮達の…

- ②⑥宿木14 もとより思ふ人 — もとよりおもふ人宇治大君…
 ②⑦宿木244 ことさらにしのひ — ことさらにしのひ別て大君…
 ②⑧宿木284 思ひ聞ゆる — 思ひきこゆる前々位にも…
 ②⑨宿木430 天人の — 天人ののね覚物語に…
 ③⑩宿木492 右のおと、 — 右のおと、夕
 ③⑪東屋12 聲なとほとく、 — 聲なとほとくほとむとなり
 ③⑫浮舟135 さばかれ給はんもいか、なれ共 — さばかれ給はんも
 いか、なれとも実事に…（整版本は「とも」を「共」に換えるこ
 とによつて項目の下に空白を作っている）
 ③⑬浮舟193 まらうとのぬしさてなみえそや — まらうとのぬしさ
 てなみえそや宿守かしく主にて…
 ③⑭浮舟241 宇治に — 宇治に爰にも
 ③⑮蜻蛉41 かたへ — かたへ兄弟也…
 ③⑯蜻蛉293 はへなん — はへなん侍るなり
 ③⑰蜻蛉299 宮の — 宮の句
 ③⑱手習293 いとおしく句 — いとおしく句なくも

一方、これとは逆に、古活字本には見出しと注釈の間に空白があ
 るのに、整版本の方に空白がない例もある。これらは覆刻の際に生
 じたミスと考えられる。次のような例である。

- ①明石114 ひとりねは入道哥 — ひとりねは 入道哥

- ②漣標214 よにつ、ましよは… — よにつ、まし よは…
 ③漣標215 下給ひし齋宮の… — 下給ひし 齋宮の…
 ④松風38 よるひかりけん史記曰 — よるひかる 史記曰
 ⑤薄雲76 引すくし青本如此すくれたるといはん用か — 引す
 くし 青本如此…
 ⑥若菜上538 佛の御てしの仏雖^{トモ}滅^{トモ}常在靈山の心を弟子等知りな
 から — 佛の御てしの仏雖滅々 為
 ⑦鈴虫103 きこえつけし付也 — きこえつけし 付也
 ⑧幻16 雪ふりたりし此段… — 雪ふりたりし 此段…
 ⑨竹川86 むつひさりし玉は… — むつひさり 玉は…
 ⑩竹川249 さるはかきりなき又自^リ是… — さるはかきりなき
 自是…

そして、古活字本にも整版本にもとも項目と注釈の間に空白が
 ない例もある。これらは、整版本に覆刻の際に古活字本の不備を訂
 正しえなかつたものと考えられる。

- ①若紫149 僧都ぎんを
 ②末摘花105 心にく、もてなし命婦の心にきき…
 ③紅葉賀110 平調にをしくたして琴柱をさけてたつる也
 ④紅葉賀111 ゆしは左の手にて及てをすことをいへり — ゆし左
 の手にて及てをすことをいへり

- ⑤紅葉賀112 一日も詩云一日も… — 一日も詩云一日も…
 ⑥紅葉賀180 七月中宮に成給へる非十月
 ⑦紅葉賀181 廿よねんとよみ給へり(あるいは見出し脱か)
 ⑧葵167 つれなの御訪やさてもとなり
 ⑨葵251 中将君といふ誰共なし東の對にて御足さすらせ給ふ也
 ⑩賢木86 わか御世のおなし事にて位をさりて世を致し給ふ
 ⑪須磨133 出いり給ひし出給ひ…
 ⑫関屋8 車ともかきおろし牛をはつし轅をおろすなり
 ⑬若菜上701 つはいもちい椿葉をへたてにしたる餅也
 ⑭若菜上714 たいくしき退々いかてかさはあるへきと云心也
 ⑮若菜下91 女御の御めのと此乳母…
 ⑯若菜下263 そのかみのかたはしもなきそと也なまくなれば…
 ⑰句宮73 おりなしからなんまさりける薫の折給ふは…
 ⑱句宮107 をしとゝめさせて夕の子共達なと薫を同道なり
 ⑲紅梅7 をのく御かたの乳母などの当母…
 ⑳紅梅32 参りくへきを北方留守にはと…
 ㉑竹川194 さまたけやうにおもふらんはしもめさましきこと句かき
 りなきにてもなり — さまたけやうにおもふらんはしもめさま
 しきこと句かきりなきにてもなり
 ㉒竹川210 とりて見給ふ玉と云義いか…
 ㉓竹川303 年比諸人望不成…

四 見出しの掲げ方の相違

古活字本と整版本との間には、見出しの掲げ方に相違がある場合
 がかなりある。

そのうち、古活字本で見出しと注釈との区切り方を誤っているの
 を整版本が正しているものには、次のような例がある。

- ①夕顔83 しをん色のおりにあひたる句 — しをん色のおりに
 あひたる句うす物のあさやかこれ
 ②夕顔318 くしは — くしはとこほる 所をとく故
 ③若紫35 かいりう王 — かいりう 王 吉祥天女…
 ④若紫166 おもかけは身をも — おもかけは 身をも心を…
 ⑤明石44 わたくしにいさゝか — わたくしに いさゝか
 ⑥濔標84 心をかれしとするもたゝ一故とは — 心をかれしと
 するもたゝ一故とは紫上ゆへ…
 ⑦濔標177 齋宮 — 齋宮御代一度に たち給へり
 ⑧濔標233 物の心しる人はさふらはれてもよくやあらんとおもへ
 — 物の心 しる人は…
 ⑨絵合35 その比 — その比院へ 源
 ⑩絵合54 御心ふかゝらていまみん — 御心ふかゝらて いまみ
 ん…
 ⑪薄雲193 世を政事は — 世を政事 は

- ⑫朝顔136 たかならはし — たかならはしおさあひより
 ⑬朝顔150 扇 — 扇冬も女はもてり
 ⑭乙女124 よ所くになりて — よ所くになりてへたゝりては
 ⑮乙女129 なにのみこ くれの源氏 — なにのみこ くれの源氏
 氏何くれと…
 ⑯篝火19 行ゑなき — 行ゑなき玉の哥
 ⑰真木柱253 なをくしき心ちして — なをくしき 心ちして句
 ⑱梅枝60 蔵人所 — 蔵人頭撰関
 ⑲若菜上678 きやうぎやう — きやう きやう
 ⑳若菜上687 をしおりて — をしおりて是も心なし
 ㉑夕霧14 松か崎のを山 さる岩 — 松か崎のを山しさる山
 ㉒夕霧33 しかはりて六時にかはれり — しかはり
 ㉓匂宮25 御そふ所 より所と云… — 御そふ所より 所と云…
 ㉔匂宮101 ことにこそあるへけれ — ことにこそ あるへけれ
 ㉕匂宮111 もとめこまひてかよれる袖 — もとめこまひて かよれる袖
 ㉖紅梅2 さしつき よ — さしつきよ
 ㉗竹川67 さらは袖ふれて — さらは 袖ふれて
 ㉘竹川72 おとゝ夕霧 — おとゝ夕霧
 ㉙竹川174 このまへ 中立也… — このまへ中立也 …
 ㉚竹川192 いきしにをといひしさまの句 — いきしにをといひしさまの句
 しさまの句

次に、見出しの掲げ方そのものに相違がある場合もある。次のような例である。

- ①桐壺77 内侍の — 内侍のし
 ②箒木30 えんすれば句 — えんすれば〔句〕は注釈冒頭に付く
 ③箒木370 人ちかゝらん — 人ちかゝらんし
 ④夕顔28 むこの — むこのし
 ⑤夕顔276 おやたち — おやたちから云出せり 三位
 ⑥若紫90 また又も同 — また又も同
 ⑦末摘花165 いとよう — いとようかさ おほせたりと…
 ⑧紅葉賀85 見てもおもふ哥 — 見てもおもふ
 ⑨紅葉賀169 中たえは哥 — 中たえは
 ⑩花宴5 宰相の中將春と云 — 宰相の中將
 ⑪花宴46 四位少將右中弁 — 四位少將
 ⑫花宴70 我か宿の花し — 我か宿の花
 ⑬花宴74 桜の唐の綺 — 桜の唐の綺は
 ⑭賢木218 白こう日をつらぬけり太子をちたり — 白こう
 ⑮須磨143 ものゝ色句し給へるし給ふ衣装 — ものゝ色句し給へる
 ⑯須磨148 あけぬ夜の — あけぬ夜の夢となり
 ⑰須磨191 とこ世いて哥 — とこ世いて哥

- ⑱ 須磨 210 ことの音に^哥 — ことの音に
 ⑲ 明石 119 遠近の哥 — 遠近のもイ哥
 ⑳ 明石 191 日記の — 日記の —
 ㉑ 濤標 26 内^句春宮 — 内句春宮
 ㉒ 蓬生 7 ひたちの宮の — ひたちの宮の —
 ㉓ 蓬生 120 尋よりてを^句 — 尋よりてを 句うちいてよ
 ㉔ 絵合 61 やよひの — やよひの —
 ㉕ 絵合 70 かくやひめ — かくやひめ —
 ㉖ 松風 38 よるひかりけん史記曰 — よるひかる 史記曰
 ㉗ 朝顔 118 いと — いとつと 様躰も：
 ㉘ 朝顔 130 むかしよりあまた — むかしよりあまた句へ
 ㉙ 初音 150 おほやけ人に — おほやけ人
 ㉚ 常夏 86 おやさくるは — おやさくる
 ㉛ 行幸 40 しかくイ — しかしか
 ㉜ 藤袴 10 さりとてかゝるあしき — さりとてかゝるし あしき
 ㉝ 若菜上 19 古院のうへ — 古院のうへし
 ㉞ 若菜上 211 小松原哥 — 小松原
 ㉟ 若菜上 237 わたくしことの — わたくしことの賀は
 ㊱ 若菜上 341 花はみな — 花はみな散過也
 ㊲ 若菜上 653 山住を — 山住を入道
 ㊳ 若菜下 448 はふきかへし給へとこそ思へと — はふきかへし給
 へとこそ思へと省
- ㊴ 若菜下 549 身もしむる — 身もしつむる 心ちしておそろしく
 うしろさむき心也
 ㊵ 若菜下 635 すき物は — すき物は栢也 好色仁は：
 ㊶ 若菜下 661 大将 — 大将栢と 談合有て：
 ㊷ 夕霧 159 ひたふる心も^{付也} — ひたふる心も付也
 ㊸ 夕霧 238 日比^{おもくイ} — 日比をもく
 ㊹ 夕霧 243 心つよき — 心つよきなれと
 ㊺ 夕霧 463 けにとも思ひ^句 — けにとも思ひ句
 ㊻ 幻 12 a おほそうに — おほそうにあたりちかく引きけては：
 (写本は12「中くよく立たり」の注釈中に埋没する)
 ㊼ 竹川 63 おりて見は^哥 (項目の下に空白なし) — おりて見は
 ㊽ 竹川 141 見わきつ^句 けに也 — 見わきつ^(マヤ) 句けに也
 ㊾ 竹川 158 うへはこゝに — うへはこゝ
 ㊿ 竹川 248 a くるしとおほして — くるしとおほしてぬい(写本
 にはこの項目なし)
- ① 橋姫 51 嶺の朝う — 嶺の朝 —
 ② 総角 320 おもひはて、^句 — おもひはて、
 ③ 総角 365 あきはて、哥 — あきはて、哥句
 ④ 宿木 12 しはしはいてや世に — しはしは
 ⑤ 宿木 268 まねひ物からまで双 — まねひ
 ⑥ 宿木 557 これよりはいとよく — これよりは
 ⑦ 東屋 188 けにたゝいまの — けにたゝいまの異本

- ⑤8 浮舟 21 年月もあまり昔をへたてゆき — 年月もあまり
 ⑤9 浮舟 29 宇治の名のりつきく — 宇治の名のり
 ⑥0 浮舟 36 こゝにはいとめてたき — こゝには
 ⑥1 蜻蛉 170 つれなしと哥 — つれなしと哥
 ⑥2 蜻蛉 208 丁子 — 丁子し
 ⑥3 蜻蛉 316 なるへきこのかみや侍るへき — なるへきこのかみや
 ⑥4 手習 197 ことなしひ — ことなしひ
 ⑥5 手習 211 たちはてゝ — たちはててし
 ⑥6 手習 318 おもひみたれて句 — おもひみたれて
 ⑥7 夢浮橋 24 a 大やけわたくしは — 大やけ（写本は 24 「くらゐ
 など」の注釈中に埋没する）
- 見出しの末尾に時々ある「一」（④・②①・②②・②④・②⑤・⑤①）や「し」（③・①②・③②・③③・③④・③⑤）のように見える符号の意味はよくわからない。前者は古活字本のみだが、後者は古活字本にも整版本にも見えている。他に「う」に見える例（⑤①）もある。
- ところで、見出しの文字遣いに目を向けると、古活字本と整版本の間に文字遣いが異なる例がいくつもある。次のような例である（整版本における所在を併記する）。どうして文字遣いを変更したのか定かでないものが多いが、③は「よ」という語の解釈の相違である。

① 乙女 391（52ウ11）数ならぬ — かすならぬ（「資料稿」に項目番号 341 とあるのは誤り）

② 藤裏葉 33（20オ2）おくしに — をくしに

③ 竹川 261（53ウ11）過にし夜の — 過にし世の

④ 総角 123（48オ10）それは（字母「八」）さるへき — それは（字母「盤」）去へき

⑤ 宿木 331（36オ1）かの御みゝ — かの御みみ

⑥ 浮舟 192（43オ9）かのみゝとゝめ — かのみみとゝめ

五 項目の頭の位置の訂正

『紹巴抄』の項目の形式は、見出しを注釈部分より1字分上げて記し、注釈の行頭は見出しより1字下がったところにそろえられているわけだが、古活字本には、見出しの頭が1字分下がったり、逆に注釈部分の行頭が見出しと同じように上がった形になっている箇所がまま見られる。整版本ではそれらレイアウト上のミスはほぼ正されている。分類して示すと、次のような諸例がある。

〔一〕古活字本で見出しの頭が1字分下がっているのを整版本で正した例

① 簪木 142 にこりにしめる

② 簪木 164 りんし

③ 夕顔 313 なくくも哥

- ④若紫125 鹿の
 ⑤若紫226 まゆうど | まゆうとにんと云人あり誤也
 ⑥乙女109 兵部卿と聞こえし今は式部卿にて
 ⑦胡蝶38 こともなき
 ⑧胡蝶90 そをれ
 ⑨梅枝59 おとゝのあたり
 ⑩横笛139 みしかく(古活字本は見出しの下に空白なし)
 ⑪鈴虫46 有はてぬ(古活字本は1字下げで一続きの和歌として記す)
 ⑫御法65 宮もかへり給はて(古活字本は1字下がってて項目としない)
 ⑬幻3 兵部卿
 ⑭早蕨87 弁の尼の
 ⑮宿木207 御たいやつ(古活字本は約半字分下がっている)
 ⑯手習49 打すてましかは^句 | 打すてましかは
- 〔2〕古活字本で誤って注釈の一部が1字分下がっているのを整版本で正した例
- ①行幸12 このゑ^音 「赤椽は黄柳と茜とにて摺たる狩衣なり」(古活字本はこの1行が1字分下がっている)
 ②若菜下5 三月^{ヤコイ}はた御きつき 「礼記唐には 忌日ありて 忌月なし」(古活字本はこの1行が1字分下がっている)

- 〔3〕古活字本で誤って注釈の一部が1字分上がっているのを整版本で正した例
- ①空蟬43 ねひれて 「軒はの荻は見事ながら 進退又温かなくとみえたり」(古活字本はこの1行が1字分上がっている)
 ②空蟬92 うつせみの哥 「うつくしきと云心もあり うつくしいとせもしはそへ」(古活字本はこの1行が1字分上がっている)
 ③薄雲138 一世の源氏又なうこん(古活字本は注釈の末尾2行が1字分上がっている)
 ④朝顔179 内にも御心のおにゝ 「薄雲の事をわさとは思召也」(古活字本はこの1行が1字分上がっている)
 ⑤乙女65 おほしかいもとあるし 「あるしは 主なり爰にても…」(古活字本はこの1行が1字分上がっている)
 ⑥乙女90 れうし 「なすらうる心也 又強…」(古活字本はこの1行が1字分上がっている)
 ⑦乙女106 もんにんぎさう 「爰迄 一日の講尺也」(古活字本は項目末尾にこの1行があり、1字分上がっている。整版本はこの行を削除し、1行分空白にする)
 ⑧乙女131 物の上手の後 「糸竹は 合器なくては…」(古活字本はこの1行が1字分上がっている。写本はこれを項目「131糸竹は」とする)
 ⑨乙女240 大殿にはことし 「をとめとも 乙女きひ…」(古活字本はこの1行が1字分上がっている)

- ⑩乙女22 あめにます哥 「みてくらは わかにはあらず…」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ⑪乙女272 あをすりのかみ 「臨時祭 舞人のは青摺と名付」 「大嘗会の時は 小忌といへり…」(古活字本はこの2行が1字分上がつている)
- ⑫乙女315 朱雀院行幸 「朝覲 朝はまいる也参心敷」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ⑬乙女325 うくひすの哥 「むつれしは 古院の事なり」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ⑭玉鬘16 舟人も哥 「神無月時雨ふる日の暮る間は…なかしとそ思」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ⑮玉鬘29 しみつのみてら 「とふさたて足柄山に舟木きり…木を」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ⑯玉鬘245 つれなくて人の 「やうにてしらんとの心と源の御すいりやうなり」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ⑰玉鬘284 かへさんとの哥 「いとせめて恋しき時はむは玉の夜の衣を返してそぬる」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ⑱蛸78 身をなけたるてまどはし 「長和二年五月十二日左大臣の上東門院の亭に行幸有」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ⑲常夏34 おなしかさし 「おなしかさしの事」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ⑳野分31 おとゝのかはら 「三躰 八句…」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ㉑行幸101 さしもあらんと 「おとゝの御心あやしくなると 双地也」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ㉒藤裏葉15 浅みとり哥 「紫の色こきまてはしらさき御代のはしめの天のは衣」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ㉓若菜下699 後漢書列傳 「韓 姓康字伯休…」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- ㉔権本22 一こつてうの心に 「桜人は 麗人敷…」(古活字本はこの1行が1字分上がつている)
- 乙女・玉鬘の巻に特に集中し、その前後にも目立つのは、古活字本の版組み作成の作業時、職人がやや注意散漫になっていたのだからか。
- 逆に、整版本の方が誤って、注釈の一部が1字上がつている例が1箇所ある(整版本における所在も併記する)。
- ①梅枝159 (14才9) 女子など 「無器用にてはいかゝまして男はとなり」(14才10、この1行が1字分上がつている)
- そして、古活字本も整版本もともに見出しの頭が1字分下がつている例も次の7例ある(整版本における所在も併記する)。これらは、

整版本に覆刻する際に訂正しそびれたものであろう。

- ① 簞木 99 a (38ウ1) おほとか
- ② 簞木 181 (46才11) きこえさせつる
- ③ 簞木 333 (57ウ6) 君達あさまし
- ④ 若紫 1 (1才10) わらはやみ
- ⑤ 末摘花 100 (36才10) かゝる事
- ⑥ 末摘花 190 (44才11) 山吹か
- ⑦ 行幸 164 (45才10) しづかみ

これらのうち、①のみは写本でも一字下がついていて、前項の注釈中に埋没した形になっている。

六 見出しの文字の誤りの訂正

項目の異同という視点で古活字本と整版本を比較した場合、最も目につくのは、見出しにおける文字の相違である。それも、ほとんどの場合が、古活字本の文字の誤りを整版本が正した形になっている。次のような諸例が挙げられる。

- ① 簞木 195 人なみくゝ | 人みなくゝ
- ② 簞木 202 手をおりての哥 | 手をおもての哥
- ③ 簞木 272 あへか | あへる

- ④ 簞木 314 したゝかなり | したゝかなる
- ⑤ 簞木 352 ひとつ | ひとつゝ
- ⑥ 夕顔 42 すほう | すをう
- ⑦ 夕顔 137 ぬかつく | ぬるつく
- ⑧ 夕顔 170 ひかりありとの哥 | ひかりあるとの哥
- ⑨ 夕顔 198 a きけとし | きけと申(写本は欄外に補記)
- ⑩ 若紫 31 けしうはあらず | けうはあらず
- ⑪ 若紫 198 御めのとこの弁 | 御めのと此弁
- ⑫ 若紫 246 そゝろさむけに | そゝろさむけに
- ⑬ 若紫 253 ふたかへり | ふたりかへり
- ⑭ 若紫 274 すきかましきこと | すきかましきへと
- ⑮ 若紫 292 すゝろ成人は | すゝろ成へは
- ⑯ 末摘花 27 まらうと | まううと
- ⑰ 末摘花 38 すいしんからこそ | すいしんかうこそ
- ⑱ 末摘花 176 かいなで | かいなく
- ⑲ 末摘花 184 かひねりは | かねねりは
- ⑳ 末摘花 211 へいちう | へうちう
- ㉑ 紅葉賀 20 御后ことは | 御后ことき
- ㉒ 紅葉賀 103 あされたる | あまれたる
- ㉓ 紅葉賀 155 ほどくゝ | ほとくゝ
- ㉔ 紅葉賀 179 うるさくてなんまで | うるくてなんまで
- ㉕ 花宴 36 帥宮の北方 | 師宮の北方

- ②6花宴49 桜の三重かさね — 桜の三かさね
 ②7花宴60 おきなもほどく — おきなもはとく
 ②8花宴64 ましてさかゆく春に — ましてさかやく春に
 ②9花宴75 しりいとなくひきて — しりいとなくひけて
 ③0葵3 御身のやんことなきもそふにや — 御身のやんことなきもそふにや
 ③1葵45 a ことなりぬ — ことりぬ（写本は1字下げて記す）
 ③2葵88 うちとけぬ朝ほらけ — うち拝ぬ朝ほらけ
 ③3葵269 あなかしこあたになといへは — あなかしこあなたになといへは
 ③4賢木29 かはらぬ色を — かはらぬ宮を
 ③5賢木50 ほとちかく — ほとちかく
 ③6賢木133 しよきやうでん — せよきやうでん
 ③7賢木199 しばふるい人 — しばふる人（ただし写本は「しばふる人」）
 ③8賢木205 宮のあひた — 宮のあひこ
 ③9賢木208 あたら — あたしおもひやり
 ④0賢木230 あひ見すて哥 — あひすすて哥
 ④1賢木300 兵部卿とも帥とも — 兵部卿とも咄とも
 ④2須磨91 いつか又哥 — いつる又哥
 ④3須磨168 えねんし（ただし頭が1字下がる） — こんねんし
 ④4須磨170 ちかきほと — ちかきほとの
 ④5須磨192 友まとはしてはいかゝ — 友まとはしてはいかゝに
 ④6須磨249 ゆるし色の黄かちなるに青にひのかりきぬさしぬき — ゆるし宮の黄かちなるに青にひのかりきぬさしぬき
 ④7明石8 みちかひにてたに人の何そ — みちかひもとに人の何そ
 ④8明石109 ほとくにつけて — ほとくにつけて
 ④9明石165 ちかき木丁のひも — ちかきる丁のひも
 ⑤0明石203 ほとさへより — ほとさへより
 ⑤1薄標2 み八講 — 三八講
 ⑤2絵合134 をれもの — をれもの
 ⑤3松風36 よするなみに — かへるなみに
 ⑤4松風53 にしぎをかくし — にしぎをかへし
 ⑤5薄雲53 まいり給へるまらうと — まいり給へるまらうと
 ⑤6薄雲116 こたい — こたひ
 ⑤7薄雲151 にひ色 — にひ
 ⑤8朝顔135 まろかれ — まろかれ
 ⑤9乙女35 をひつかすまじう — をひつるすまじう
 ⑥0乙女73 さるかうかましく — さるからかましく
 ⑥1乙女172 おしくあさやき — おかしくあさやき
 ⑥2乙女177 見給へも付す — 見給へ付す
 ⑥3乙女219 おもふ給へらるゝ事はしかなん — おもふ給へらるゝ事はしりなん

- ⑥4 乙女 289 きんち□(一字分空白)は — きんちうは(整版本は、古活字本の「う」を「ら」に訂正するつもりで削ったまま忘れられたか)
- ⑥5 乙女 305 物うくのみ — 物こくのみ
- ⑥6 乙女 314 いつかしき — いつかしき
- ⑥7 玉鬘 30 きゝついつゝ — きゝついつゝく
- ⑥8 玉鬘 60 君にもし哥 — 君もしい哥(「靈也 此哥は廣経」ナシ)
- ⑥9 玉鬘 82 このちのせいしをは — このちのせいしとは
- ⑦0 初音 22 きこへかはし給ふ — きえかはし給ふ
- ⑦1 初音 49 えしも見過し — えしも見返し
- ⑦2 常夏 134 くちいれかへさい — くちいれかへさは
- ⑦3 行幸 11 たかゝひにかゝつらひ — たかひにかゝつらひ(写本は「たかにかゝつらひ」)
- ⑦4 真木柱 49 内への給はする — 内々の給はする
- ⑦5 藤裏葉 192 れいのみつらにひたいはかり — れいのみつらにひたいけり
- ⑦6 若菜上 224 すかゝき — すかゝき
- ⑦7 若菜上 227 のほる音の — のほる昔の
- ⑦8 若菜上 239 時くは老やまさると — 時くは老やまさるゝ
- ⑦9 若菜上 245 御車よせたる所に — 御車かせたる
- ⑧0 若菜上 298 よだけく — よたふく
- ⑧1 若菜上 485 世をすてゝ哥 — 世をすてし哥
- ⑧2 若菜上 523 むかふるはちす — むかふるはち
- ⑧3 若菜上 576 ゆつりきこえ — ゆつりきこえ
- ⑧4 若菜上 613 いとつきなし — いと□□(文字欠損)きなし
- ⑧5 若菜上 690 ひこしろふ — ひうしろふ
- ⑧6 若菜上 713 中の御おほえの — 中の御かほえの
- ⑧7 若菜下 360 はやくより — はやくより
- ⑧8 若菜下 373 こちたく — こちなたく
- ⑧9 若菜下 606 内わたりなど — 打わたりなど
- ⑨0 柏木 29 だらにのこゑ — たしにのこゑ
- ⑨1 柏木 226 此玉はぬく — 此玉いぬく
- ⑨2 横笛 142 心とさしすきて — いとさしすきて
- ⑨3 鈴虫 49 わか御あつかひ — わか御あそひ
- ⑨4 夕霧 242 ひきへたてめくらし — ひきへたてめつらし
- ⑨5 御法 12 内東宮后宮 — 内侍宮后宮
- ⑨6 御法 75 おほけなき — おほせなき
- ⑨7 御法 107 露けきは哥 — 露けきは哥
- ⑨8 御法 113 物おほえぬ御心にも — 物おほえぬ御心にも
- ⑨9 幻 69 おほしたるさまから — おほしたかさまから
- ⑩0 幻 76 わろき — わかつき
- ⑩1 匂宮 5 かたしけなし — かたけなし
- ⑩2 匂宮 24 ひんかしの院 — みかしの院
- ⑩3 匂宮 54 世をへても(「世をかへても」が正しい) — 世をかひ

- へても
- ⑩⑨ 匂宮 86 十九になり給年 — 十九になる・給年^(4,4)
- ⑩⑧ 紅梅 27 おなしことゝ — おなしかとゝ
- ⑩⑦ 紅梅 51 しる人そしる — しり人そしる
- ⑩⑦ 竹川 83 こちしのおとゝの — こちうのおとゝの
- ⑩⑧ 竹川 88 さき草うたふ — さき草こたふ
- ⑩⑨ 竹川 98 なにそもそ — なにそもとそ
- ⑩⑩ 竹川 265 よ一夜所くかきありきて — よ一夜所くかきありきて
- ⑩⑪ 竹川 270 一夜の月影は — 一夜の月影に
- ⑩⑫ 橋姫 48 みし人も哥 — みしくも哥
- ⑩⑬ 橋姫 100 けになへてに — けになくてに
- ⑩⑭ 橋姫 217 ほぐ — ほゝ
- ⑩⑮ 椎本 79 さすらへん契かたしけなく — さすへらん契かたしけなく
- ⑩⑯ 椎本 84 三味けふはてぬらん — 三味けふはてぬらん
- ⑩⑰ 椎本 95 又あひみるごと — 又あるみるごと
- ⑩⑱ 椎本 156 もらしきこえたりけん — もえしきこえたりけん
- ⑩⑲ 椎本 195 雪ふかき汀の小芹哥 — 雪ふかき汀のふせり哥
- ⑩⑳ 総角 37 いける世の — いかける身の（写本も「いける世の」だが、「いける身の」が正しい）
- ⑩㉑ 総角 178 霧深き哥 — 霧ふき哥
- ⑩㉒ 総角 190 みとかめん人なれとも也 — みとかめん人なれとも也
- ⑩㉓ 総角 255 かよひたまはさらん — かよひ給はんさらん
- ⑩㉔ 総角 371 人なみく — 人みなく
- ⑩㉕ 総角 433 あられふる哥 — あられふる哥
- ⑩㉖ 総角 436 五せちなとゝく — 五せちなとゝく
- ⑩㉗ 総角 512 よもの山鏡を — よもの山鐘を
- ⑩㉘ 早蕨 12 ないえん — いなえん
- ⑩㉙ 早蕨 66 ひたいの程 — ひたいの躰
- ⑩㉚ 早蕨 92 年比 — 年比々
- ⑩㉛ 宿木 176 わか御身になしても — わか御身なしても
- ⑩㉜ 宿木 341 からうして — かううして
- ⑩㉝ 宿木 406 かすまへ給は — かすまへ行は
- ⑩㉞ 宿木 430 天人の — 天人の（古活字本は空白なく注釈に続く）
- ⑩㉟ 宿木 436 その中納言 — そのわたり
- ⑩㊱ 東屋 50 まうてこと — まとてこと
- ⑩㊲ 東屋 58 このほと心のさしに — このほとてにとりかへて）
- ⑩㊳ 東屋 93 こ宮 — こ宮は宮（古活字本の「は宮」は注釈の「八宮」を誤つたもの）
- ⑩㊴ 東屋 112 あつまきぬ — あつまきや

- ⑭東屋113 まらうとの御でゐ — まうかとの御でゐ
- ⑮東屋115 はしたなけなるまじうはこそ — はしこなけなるまし
うはこそ
- ⑯東屋274 ことやうなりとも — こゝやうなりとも
- ⑰浮舟34 御めたてゝ — 御めたてゝ
- ⑱浮舟55 けふあすよも — けふあそよも
- ⑲浮舟129 いらへきこえん — いらへきこらん
- ⑳浮舟169 すゝろなる — こゝろなる
- ㉑蜻蛉25 きつねめく物 — きつねめく物也(写本「きつねめく物や」)
- ㉒蜻蛉104 かゝる事とも — かゝる事とそ
- ㉓蜻蛉163 いたき — いたさ
- ㉔手習16 しるくや思ふらん — しるくやおもふらん
- ㉕手習127 わつらはしかり — わつらわしに
- ㉖手習192 さるかたに — さきかたに
- ㉗手習313 さなの給ひそ — さなの給ひか
- ㉘夢浮橋47 うちおほえ — うちおほみ
- 見出しにおける文字の相違の中には、少数ではあるが、もともと
の古活字本の形が正しく、訂正したはずの整版本の方が誤っている
かと思われる例も見出される。だいたい次のようなものが挙げられ
ようか(整版本における所在も併記する)。

- ①末摘花192(44ウ2) □(1字空白)のに — ものに
- ②葵184(46ウ10) 中将もにひ色のなをし — 中将君にひ色のなを
し
- ③賢木185(16ウ4) かけまくも哥 — かけまくは哥
- ④乙女347(49ウ5) いんもくらへ — ゐんもくらへ
- ⑤若菜上649(53ウ5) さはいへと — さもいと(写本「さもいと」)
- ⑥若菜下88(9オ6) 舞人□□□□(約5字分空白) たけたち
— 舞人まゆうと たけたち(整版本は「舞人」の付訓を脱して
いる。片仮名小字で記すつもりで忘れたのだろう)
- ⑦夕霧358(28ウ1) かの日は — かの昔は(写本も「日」だが「昔」
が正しい)
- ⑧紅梅111(33ウ10) おひさきとをき — おひさきとをく(写本
「おひさき遠く」が正しい)
- ⑨椎本161(33ウ4) しをさることなどの — なをさることなどの
- ⑩早蕨98(9オ8) 又はときぐ — 文はときぐ
- ⑪宿木175(24オ10) ことえりして — ことほりして(写本は「こ
とえりして」。『源氏物語』本文、三条西家本は「ことえり」とあ
るが、青表紙諸本は「ことほり」)
- ⑫宿木353(38オ10) かたみになと — かたみなと(写本「かたみ
なと」)
- ⑬手習39(29ウ9) まへみやられし火は — よへみやられし火は

依拠した『源氏物語』本文がいかなるものであったかにもよるが、覆刻にあたって訂正したばかりにかえって誤ってしまったものも、このように十数例は存在するのである。

ところで、次の2例は、古活字本の文字の誤りを整版本もそのまま踏襲している例である。整版本に覆刻するにあたって訂正し忘れたのであろう（整版本における所在も併記する）。

- ①若菜下570（42ウ7）つるに御ほいのの事（「の」が衍字）
- ②椎本191（36オ2）出い人に（写本「おい人に」が正しい）

七 覆刻の際に生じたレイアウト上の問題点

何度も言うように、整版本への覆刻に際しては、古活字本の紙面を切り貼りして一面十行本から十一行本へと変更している。整版本の版面を見ると、ほとんど切り貼りの跡がわからないほど精巧に行なわれているのだが、それでも細かく調べると、切り貼りの際の手際から行頭の高さに誤差が生じて見出しや注釈部分の位置にやや問題のある箇所が存する。次のような例である（整版本における所在も併記する）。

- ①紅葉賀128（11ウ10）かたつかたにては（見出しの頭が1字分上がつている）

- ②須磨53（36ウ1）夜につゝみて（見出しの頭が約半字分下がつている）
- ③蓬生44（44ウ2）うるはしくそ、45（44ウ3）齋院（見出しの頭がともに約半字分下がつている）
- ④蓬生104（48オ7）此人も、105（48オ8）遺言は、106（48オ9）玉かつら哥（見出しの頭がそれぞれ約半字分上がつている）
- ⑤絵合96（10オ1）左近の中將、97（10オ2）身こそかくの哥（見出しの頭がともに1字分下がつている）
- ⑥朝顔61（6オ9）さふらふ人く（この項目の2行目と3行目の注釈の頭が約半字分上がつている）
- ⑦朝顔169（15ウ1）わくる御心ち（見出しの頭が約半字分下がつている）
- ⑧梅枝161（14ウ1）上中下、162（14ウ2）此御はこ（見出しの頭がともに約半字分下がつている）
- ⑨若菜上57（5ウ1）やんことなく（見出しの頭が約半字分下がつている）
- ⑩横笛121（31ウ8）なをしのかきりきて（この項目の2行目から4行目までの3行の注釈の頭がほぼ1字分上がつて、見出しと同じような高さになっている）
- ⑪竹川33（37オ1）三条宮と（見出しの頭が約半字分下がつている）
- ⑫橋姫105（10オ7）いる日をかへす（この項目末尾の1行（10ウ1）の頭が1字分上がつて、見出しと同じ高さになっている）

これらの例はごく少数存する整版本におけるレイアウト上の不備であり、まさしく玉に瑕というべき微細な欠点ではあるけれども、それがすることは、確かに古活字本から整版本への覆刻が切り貼り作業を介して行なわれたことを我々に教えてくれる徴証であると言える。実際、右に挙げた箇所を古活字本の行配りとつきあわせてみると、例外なく一面の行数を変更するためにその箇所で切り貼りが行なわれたと考えられる箇所になっているのである。

最後に、レイアウト上の問題として、『紹巴抄』は、古活字本、整版本ともに巻の切れ目は面を改めているのであるが、古活字本は、唯一、篝火巻の冒頭を前の常夏巻末の丁に追い込んでいることを付け加えておく。何らかの理由で原則が破られていたのだが、整版本では改められている。

おわりに

『紹巴抄』の古活字本から整版本への覆刻の際に行なわれた本文の改訂の様相を、全巻にわたって項目の出入りと見出しの形態・表記の異同を精査することによって明らかにした。製版覆刻本が作られたことによつて、古活字本が持つていた不備や欠点が大幅に解消されたことは間違いない。若干の訂正漏れや、まれに新たに生じた誤りもあり、一面の行数を十行から十一行に変更したためにレイアウト上の不都合が生じた箇所も少々あるけれども、総じて見事な覆刻版作成がなされていると言つてよい。古活字本は伝存する本がご

く少ないため、整版本に比して稀覯本扱いされているけれども、内容的には、断然整版本のほうがすぐれているわけである。

それにしても、古活字本にある項目の脱落箇所を補うにあつて、覆刻の際にはどうやらもとの古活字版と同じ活字で組んで印刷し、それを覆刻版の版下にするという手のこんだことを行なっているように見えることは、寛永期という古活字本から整版本への移行期における刊本作成の実態を垣間見させて、実に興味深いものがある。

〔付記〕本稿は、平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C『源氏物語』古注釈資料のデータベース化に関する研究』（研究代表者・妹尾好信）の一環をなすものである。古活字本と整版本との間の項目異同の調査にあつては、研究補助者として、安道百合子・小川陽子両氏に多大な協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。

〔追記〕本論集の前号および前々号（第六十三巻・第六十二巻）掲載の拙稿において、「整版本」とあるべきところが表題を含めてすべて「製版本」と誤っていました。不注意をお詫びするとともに、謹んで訂正いたします。

***Genjimonogatari-Johasho*: from the Book in Wooden Type to the Reprint**

— The Aspect of Revision from the Viewpoint of the Topical Variants —

Yoshinobu SENO

Genjimonogatari-Johasho has two types of books: the book in wood-block letters and the reprint, i.e. the revised edition reprinted from the wood block with kana syllables written alongside Chinese characters and return marks placed at the left-hand side of characters in the classical Japanese text. In the process the original, which consists of pages of ten lines, was cut and patched so as to include pages of eleven lines.

This paper considers the aspect of revision from the book in wooden type to the reprint, focusing on the topical variants. It is illustrated that, though we find the omissions and defects in layout in the original corrected, there exist some errors newly made by putting a patch in the revised version.